歴史を愉しむ

事前特集

Omoshiro Rekishi Festival

10月7日、8日と田原本町の鍵唐古・鍵遺跡公園で開催されるおもしろ歴史フェスティバル。その1日目の服部静尚氏による講演「壬申の乱と藤原京」の講演要旨を掲載します。

壬申の乱と藤原京
―呪われて捨てられた藤原宮
服部　静尚氏

一、中大兄皇子は蘇我氏を主家としていた

（1）記紀はカムヤマトイワレヒコつまり神武天皇を初代天皇としますが、九州からやって来てクサカでナガスネヒコに敗れた後、何とか奈良盆地の南部に本拠地を構えることができた彼が、日本列島全体を統治したと考える方はおられないでしょう。この天皇称号は701年以降の大和朝廷が、近畿天皇家の祖先に遡（さかのぼ）って与えた称号であって、実体ある天皇ではないのです。

（2）『日本書紀』を分析すると、ずっと蘇我氏が近畿天皇家の主家だったと見える。

用明2年（586）蘇我馬子大臣（注1）が（近畿天皇家の）穴穂部皇子と宅部皇子を誅殺します。にもかかわらず、『日本書紀』は同年7月この馬子がまるで（近畿天皇家の）泊瀬部皇子・竹田皇子・廐戸皇子・難波皇子・春日皇子を引き連れて、物部守屋の討伐に向かったかのように記しています。

そして即位した崇峻天皇（泊瀬部皇子）を、馬子は東漢直駒を使って殺します。蘇我氏が近畿天皇家の臣下であれば、馬子大臣は罰せられて当然ですが、そのような記事はありません。それどころか、推古22年（614）8月に馬子が病に臥せた時には、馬子の回復を願って男女千人が出家したとあります。また、大化元年（645）8月条では、蘇我稲目・馬子父子を仏教守護の大功績者として讃（たた）えています。

天皇の皇子を殺害した臣下を罰するどころか称賛する、まさに主従逆転が見られるわけです。「天皇家の祖先に遡って天皇称号を与えた」近畿天皇家であれば、これらの記事もなるほどと言えるのです。この時期、近畿天皇家は九州王朝の大臣であった蘇我氏を主家としていたのです。なお、蘇我氏の氏上（うじがみ）はこの後、蝦夷から蝦夷の弟倉麻呂の子（石川麻呂・赤兄）へ移ります。

欽明天皇は蘇我稲目の娘である堅塩媛と小姉君を妻とし、崇峻天皇は馬子の娘である河上娘を妻とし、厩戸皇子は同じく刀自古郎女を妻とし、舒明天皇も同じく法提郎女を妻とし、中大兄皇子は石川麻呂の娘である姪娘を妻とする。これほど主家の娘を妻に迎えることができた近畿天皇家は蘇我氏の配下であっても上位にあって、ほぼ蘇我氏の一族と同化していたと見られることを追記しておきます。

（3）中大兄皇子も蘇我氏を主家としていた。「天皇家の祖先に遡って天皇称号を与えた」ならば、中大兄皇子も天皇の皇子ではなくて、蘇我氏の配下にあったことになります。このような視点で、『日本書紀』が描く乙巳（いっし）の変を考察してみましょう。

皇極4年（645）6月の大極殿で行われた三韓進調の儀式に中大兄皇子は参加せず（参加できず）に、殿の側に長槍を持って（中臣鎌子、海犬養勝麻呂・佐伯子麻呂・葛城稚犬養網田らと共に）隠れていて、やあーと叫んで儀式に討ち入り、蘇我入鹿を斬り殺したとあります。これが乙巳の変の始まりです。

潜む中大兄皇子
（絵・川北結衣菜）

（4）当時には「殿上人」までの制度はなかったと思われますが、大極殿に昇殿できる臣下は限定的であったと想像されます。九州王朝内では中大兄皇子はそこまでの身分でなかったようです。この描写からは、蘇我倉山田石川麻呂が蝦夷・入鹿を滅ぼして、蘇我宗家の地位を奪った。中大兄皇子はその刺客の一人であったと見えるのです。だから隠れていて突然おし入って斬りつけたのです。

多くの歴史学者は、この乙巳の変で蘇我氏専横の時代が終わったとしますが、変後の人事を見れば分かるように、蘇我蝦夷に代わって蘇我石川麻呂が右大臣になっています。その後石川麻呂の弟蘇我赤兄が左大臣になっています。蘇我宗家は変わりましたが九州王朝内での蘇我氏の立場は変わっていないのです。

（5）次に、大化元年9月条の古人皇子謀反記事です。『日本書紀』は古人皇子を中大兄皇子の異母兄とします。吉備笠臣垂の謀反密告により、中大兄皇子が古人皇子を攻め、斬り殺しています。石川麻呂の指示で中大兄皇子が動いたと言う見方もありえるのです。

そして、斉明4年（658）の有間皇子謀反未遂事件が起こります。正木裕氏（注2）は「先ず宮室を焼いて、五百人で牟婁津に一日両夜とじこめ、船団で淡路国を絶って堅く守れば事が成る」と、謀反側は淡路島の西方から反撃に備えており、この有間皇子の謀反は九州王朝に対するクーデター計画だと指摘されています。

この事件はそもそも、民から財を召し上げ倉に貯め、長い運河を造り浪費し、船で石を運んで丘に積んだと、蘇我赤兄が九州王朝天皇批判を有間皇子に漏らしたことより始まっています。

（6）留守官であった蘇我赤兄の施政批判を聞いて、有間皇子は我が意を得たりと、赤兄の家に登楼して挙兵策を練っています。臣下の家で、臣下の意見を聞いて策謀するとは考え難いので、赤兄こそが謀反の画策者だったのでしょう。これが発覚してしまったので、その罪を配下の有間皇子に擦り付けた事件であったと考えられるのです。中大兄皇子の詰問に、有間皇子は「天と赤兄のみが知る。私は何も知らない」と答えています。ここでも中大兄皇子が誅殺に関わっているようです。

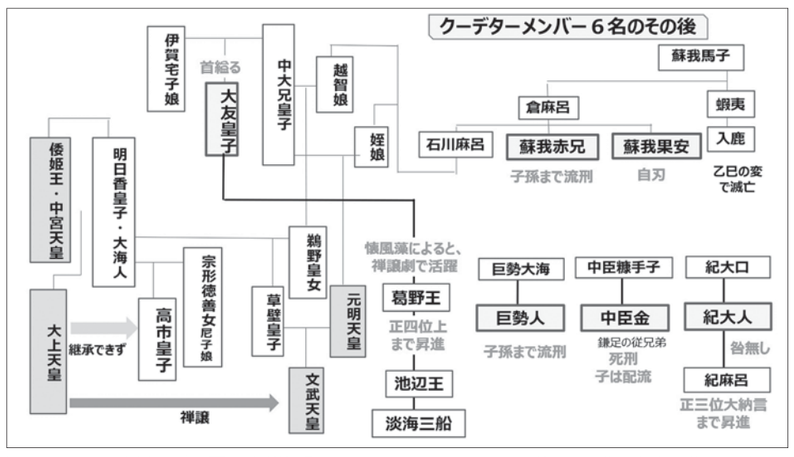
以上のように、『日本書紀』天智紀（662～671年）以前においては、近畿天皇家は蘇我氏を主家としていたと見られます。その近畿天皇家が天皇に成り上がれるような事件は天智紀には伝えられていません。やはり、天智期においてもその関係が続いたとみるのが妥当です。つまり中大兄皇子は摂政でも天皇でもなかったのです。

黒幕の蘇我赤兄
（絵・川北結衣菜）

周礼型に改造するも平城遷都

二、壬申の乱は九州王朝に対する蘇我赤兄ら重臣のクーデター未遂

（1）壬申の乱の結果を見れば、この乱の首謀者が誰であったか分かります。『日本書紀』が首謀者とする大友皇子は自害しますが、その嫡子葛野王はその後の文武天皇擁立時の立役者として活躍します（『懐風藻』葛野王伝による）。大友皇子の子孫は滅んでいないのです。この結果は大友皇子首謀説を完全に否定するのです。



（2）『日本書紀』が描く壬申の乱では、大海人皇子は東国に留まったままで勝利の報告を受けます。実際に軍を率いてクーデター軍を征圧したのはその長子である高市皇子です。

『日本書紀』は大海人皇子を「皇弟」と呼称するので、当時の九州王朝天皇（野中寺弥勒菩薩像銘に見える中宮天皇だと推測する）の弟だったと考えられます。687年にこれを引き継いだ大上天皇（いずれも注3を参照）の時代に、高市皇子は皇太子となっていたことが『懐風藻』の記述で分かります。

『懐風藻』葛野王伝によると、大友皇子の長子である葛野王が696年の高市皇子死去後の新しい皇太子選定の会議で（発言権があったようで）重要な役割を担っており、その後正四位上式部卿を叙任され、慶雲2年（706）12月に寿命を全うしています。彼は淡海三船の祖父にあたります。繰り返しになりますが、壬申の乱の敗者側トップの嫡子が敗戦後に重用されるはずがありません。

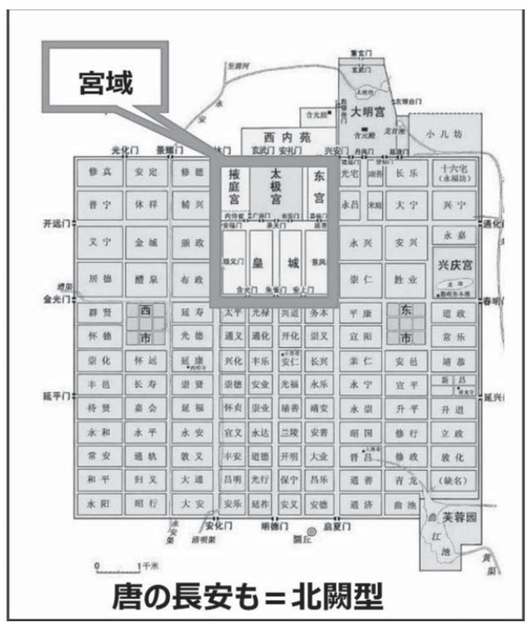
（注3）『中宮天皇―薬師寺は九州王朝の寺―』服部静尚、2022年、『古代に真実を求めて第25集』に掲載

（3）持統期に九州王朝のもとに、（宮域を京城の北側に置く北闕＝けつ＝型の）藤原宮が造営された。

686年の難波宮焼失で、急きょこれに代わる新宮が必要になります。690年の「高市皇子が藤原宮地を観る」記事で、まさに藤原宮造成がスタートしたのです。そして694年12月6日の「遷居」9日の「百官拝朝」でおおむね完成したと見られます。なお、藤原宮に先立つ難波宮は北闕型です（現在までの発掘成果で藤原宮は京城の中央に宮域を持つ周礼型とされていますので、その後宮域が造り替えられたことになります）。

この北闕型宮城は唐の長安城に倣ったものと考えられます（注4）。

（注4）唐の長安城は隋の大興城を受け継いだ東西18里・南北15の北闕型宮城。（西森正晃『伝統的都市計画から見た唐の長安城』金大考古36巻2001年より）



悲劇の高市皇子
（絵・川北結衣菜）

（4）王朝交代を成し遂げた文武天皇は、粟田眞人の報告を受けて、藤原宮を周礼型に改造した。

703年11月20日、先のとおり完成済みの藤原宮であるのに、「始めて藤原宮地を定める。宮中に宅が入っている百姓千五百戸に布を賜う」と不可解な記事があります。

そして、木下正史氏（注5）によると、「宮内（宮域のこと）となる部分でも、宮の造営に先行して条坊道路が施工された～そうした道路が微妙にずれるかたちで、2時期にわたり存在する～これらの道路側溝を切って、資材運搬用とみられる運河が掘られており、その埋土の中から建築部材や手斧屑とともに682～684年の干支～を記した木簡が出土している」とあります。つまり、既にでき上っていた条坊を壊して新たに宮域が造られていたことが発掘によって判明しているのです。694年に藤原宮の内裏・朝堂院は完成したのですが、これを捨て、新たに別の場所に宮を造ることを決めたのです。

（注5）木下正史、佐藤信『飛鳥から藤原京へ』2010年、吉川弘文館140頁～

（5）なぜ、そのようなことを企てたのでしょうか。この決定の直前にある遣唐使粟田朝臣眞人の帰還報告に原因があると考えています。遣唐使粟田眞人は唐にはいなくなった」というのです。孝徳期に既に難波宮が完成しているのであれば、「複都詔」は矛盾します。既に難波宮が存在するのに「先ずは難波に都を造ろうと欲する。百寮は難波に行って家地を賜われ」という詔はあり得ません。つまり、この一連の新宮造成記事は34年前の孝徳期における難波宮造成記事がずらされて、ここに挿入されたとする正木裕氏の見方が妥当となるわけです。

佐藤隆氏（『難波と飛鳥、ふたつの都は土器からどう見えるか』2017年）によると、「（難波宮）宮殿造営期以後の土器もかなり出土していて、整地によって開発される範囲も広がっている」とあり、孝徳期に造営された難波宮はその後も朱鳥元年（686）の火災直前まで使われていました。天武期は難波宮火災前の時期にあたるので新たに藤原宮を造成する理由もありません。

（6）文武天皇は武周に倣って、新しく京城中央に宮を移すことを決め、新宮造営に先立って立ち退かせた百姓1500戸に布を与えたのです。このような莫大な費用をかける国家事業の変更である。則天武后の武周に倣ったという理由以外には考えられません。その変更を決意した時期も粟田真人の帰国報告のタイミングしかありえません（本来条坊道路を設けない）。宮域内の先行条坊の存在や、宮域内朱雀大路は16丈幅で、京内朱雀大路はこれを24丈幅に拡張した跡があることも傾（うなず）けます。元々藤原京は北闕型宮城であって、朱雀大路（京域の中心線）も現在位置と違っていたのです。藤原宮の宮域は（大宮土壇と呼ばれていた）現状位置で確定していますが、それ以前には、喜田貞吉氏らの長谷田土壇（右図参照）説も有力視されていました。元々、長谷田土壇の位置に北闕型宮域が造られたのだが、これを周礼型に改造するため大宮土壇に移したのではないでしょうか。解体した礎石・瓦・柱など主な資材を再利用のため、長谷田土壇から大宮土壇へ運ぶ目的で運河が造られたのでしょう。この武周も神龍元年（705）則天武后の死で終わり唐が復活します。故に707年から計画が始まる平城京は北闕型に戻るのです。

四、高市大寺を移転させた大官大寺の造営と焼失

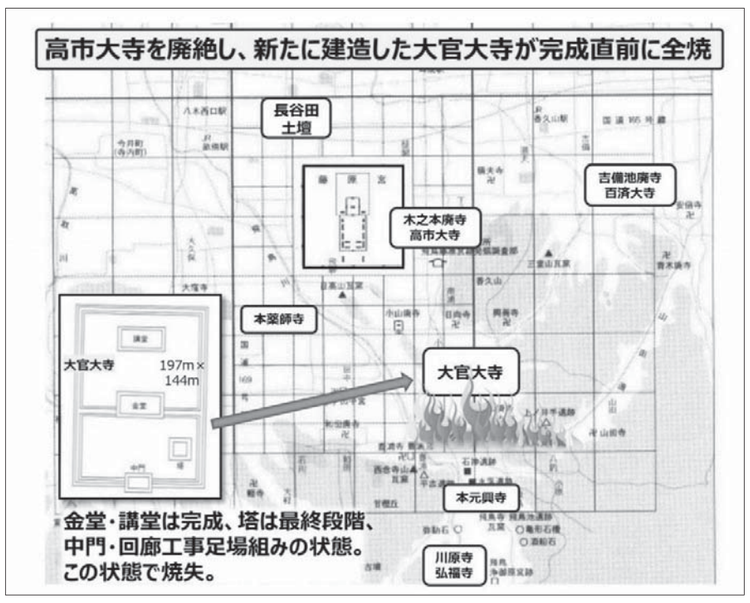
（1）『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、我が国最大の寺院（つまり大寺）の創建話が記述されています。百済川の側に百済大寺を建てたが社神の呪いで失火し九重塔ならびに金堂石鴟尾（しび）が焼失した。発掘結果より630年代から640年代の早い時期に創建され、比較的短時日のうちにこの地での命脈を絶った吉備池廃寺がこれにあたると考えられます。そしてこれを百済の地から高市大寺です。発掘結果より高市大寺に移した。これが高市大寺です。発掘結果より吉備池廃寺の創建瓦と、7世紀後半から8世紀初め頃の瓦も出土している木ノ本廃寺がこれにあたると見られます。木之本廃寺（つまり）高市大寺は、周礼型宮域造営の邪魔になったのか、またもや廃絶されます。高市大寺改め大官大寺として移設建て替えが行われます。

木下正史氏（注6）によると、この大官大寺が建設途中で焼失していることが発掘により判明しています。その金堂と講堂は基壇化粧まで完成し、塔の建物本体は出来上がっていたのですが、最終段階の基壇側面の化粧作業が未着手だったようです。中門と回廊は建物本体の造営工事の足場が組まれた状態で焼け落ちていました。

焼失後に、金堂基壇の化粧石が抜き取られていましたが、抜き取りされた溝から出土した土器によって、8世紀第1四半期頃のものだと判明しています。発掘結果は大官大寺が未完成だと証言しているのです。

大官大寺の造営は天武期に遡ることはあり得ず、文武期の造大官大寺寮による造営だったことになります。『扶桑略記』によると「和銅3年（710）、移立大官大寺於平城京。和銅4年（711）、大官等寺並藤原宮焼亡」とあって、「未完成の大官大寺が710年に平城京に移され、元の藤原京大官大寺が711年に火災にあった」とする不可解な記事があります。藤原宮が焼失したという発掘報告もなく、『続日本紀』は藤原宮の火災も伝えていません。ついでで言えば『続日本紀』は大官大寺の創建中火災についても一切口をつぐんでいます。

（注6）木下正史『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』2005年、角川書店



五、遷都後15年足らずで周礼型に改造して1～2年で捨てられた藤原宮

（1）高市大寺を廃絶させて、代わりに造営した大官大寺が完成直前に全焼してしまったことは、文武天皇以下近畿天皇家一同に非常なショックを与えたに違いないと思われます。九州王朝の後継者たる高市皇子の死後すぐに、政権を奪ったその呪いと考えたのでしょう。

（2）文武天皇は亡くなる4カ月前に遷都の議論をさせており、次の年には元明天皇が平城遷都を宣言しています。694年九州王朝の藤原宮遷都があって13年後、まして周礼型に改造して1～2年後のこの時期に遷都を計画しているのです。排水がうまくできなかったとの説がありますが、それなら周礼型に改造する必要はないわけです。理由の一つとして否定はしませんが主たる理由ではないだろうと思われます。

『続日本紀』慶雲4年（707）2月条◆慶雲4年2月19日、遷都の事を議らしむ。